

弥生町文化財調査報告書 第3集

小田山城跡と関連遺跡

—— 第1次調査報告書 ——

1994

大分県南海部郡

弥生町教育委員会

例 言

1. 本書は、弥生町教育委員会が国庫及び県費の補助を得て実施した町営林道建設に伴って行われた小田山城跡と関連遺跡の第1次試掘調査の報告書である。
2. 発掘調査にあたっては弥生町農林水産課・大分県教育委員会のご協力を得た。
3. また、調査では地主の加藤 擴・加藤 隆・加藤義重・加藤富子・津崎賢一・山口スマ子の各氏のご協力を得た。
4. 本書で用いる方位は磁北である。
5. 出土した製鉄関連遺物は大沢正己氏（新日本製鐵株式会社八幡技術研究部）に鑑定していただいた。
6. 小田遺跡の石碑の解説は佐藤見洋・三重野 誠氏（大分県文化課先哲叢書編さん班）のご教示を得た。
7. 調査団の構成は以下のとおりである。

調査主体 弥生町教育委員会

調査団長 川野 義幸（弥生町教育長）

調査指導員 後藤 宗俊（別府大学教授）

海老沢 爽（早稲田大学助教授）

千田 嘉博（国立歴史民俗博物館助手）

西ヶ谷恭弘（日本城郭資料館長）

調査事務 小野 英治（弥生町社会教育課長）

調査員 清水 宗昭（大分県教育委員会文化課主幹兼埋蔵文化財第1係長）

高橋 信武（埋蔵文化財第1係主査・調査担当）

調査作業員 山口スマ子・加藤三重子・加藤初子・加藤キクエ・山口二士子・加藤ワキ・加藤美智子・山口初子・梁井 栄・河野孝義・染矢シゲ子・染矢町子・入江政子・仲野キチ・石井 隆・荻 文子・市原トミ子・古藤田 太・鶴原政子・御手洗峯子・梅田サク・市野瀬道子・高野きが・小野ミサオ・五十川千代見・田原静香・加藤 擴・津崎賢一・加藤義重・加藤富子・染矢康久・佐藤久枝

8. 本書の執筆・編集は高橋信武が行った。

目 次

はじめに

調査に至る経過	1
調査区の立地と環境	1
調査の記録	
小田遺跡の調査	3
小田宮の原遺跡の調査	6
おわりに	11
報告書抄録	12

はじめに

調査に至る経過

弥生町農林水産課では、平成5年(1993)より3年度計画で町の東部に位置する小田山周辺の材木搬出のための町営林道の建設を計画していた。小田山には山頂に中世の小田山城跡があるほか、その東側の尾根続きには中世の佐伯氏の本城である榊牟礼城跡があり、最近の調査でこの付近の山中には相当広範囲に山城遺構が遺存していることが分かっている⁽¹⁾。県文化課及び町教育委員会で工事予定地が小田山城跡に近接し、遺構を損傷する可能性が考えられるため予定路線の再考を求め、担当部局の協力を得ることができた。

工事は今年度から始まるが、これまで知られていない遺構が道路予定地にあることが考えられるので工事前前に試掘調査を実施し、併せて周辺の開発が急速に進行している山麓部の遺構の遺存状態の確認を行った。このうち山の谷に囲まれた小田山地区で、3ヶ所のトレンチのうち1ヶ所縄文時代の遺跡を確認したが、狭い尾根上にあるので全面調査を行った。

発掘調査は平成3年(1993)11月1日から12月7日まで実施し、その後若干補足調査を行った。

調査区の立地と環境

今年度調査した2遺跡は、大分県南海部郡弥生町大字小田(こだ)字小田(小田遺跡)と宇宮の原(宮の原遺跡)にある。同地区は弥生町の東部にあり、北側には標高223.7mの榊牟礼山から南側に続く尾根が佐伯市との境界となり、榊牟礼山から西側に延びた尾根の上には小田山城跡がある。このように東と西を山に囲まれており南側に開けた地形となっているが、その南側には附近に番匠川が流れているため三方を山と川に囲まれた独立した空間を呈している。この空間内部の東半部には宮河内川の細流が番匠川に注ぎ、狭い谷水田が榊牟礼山に向かって切り込んでいる。小田遺跡は、谷水田のさらに奥の谷底に近い小さな尾根上にある。また、西半部には南北約150m・東西約100mで標高20m前後の台地が三方を水田に囲まれている所が小田宮の原遺跡である。東側の水田より数m高い位置に「しもんきど」という地名、南から西側にかけて「でほりぐみ」という地域名があり、これらは中世の名残とも考えられる(Fig 2に使用した下木戸・出郷は当て字である)。台地の基盤は阿蘇Ⅳ溶結凝灰岩からなり上部には厚く火山灰層が堆積している。そして空間の中央部には、小田山から延びた細長い尾根が番匠川に向かって突き出している。

本地域周辺の歴史的環境について述べれば、旧石器時代・縄文時代・弥生時代の遺跡は弥生町内では未発見である。ちなみに5kmほど西方にある本匠村の鍾乳洞の聖岳洞窟からは旧石器時代の人骨が出土して全国的に知られている⁽²⁾。町の中心部の西側の崖面に40基以上の墓が掘り込まれているが、これは古墳時代につくられたものである。近年急傾斜地対策として発掘調査が行われ、この上小倉横穴墓群は6世紀中頃から7世紀初頭までに連続的につくられた家族墓のようである⁽³⁾。横穴のある崖面の最下部には上小倉崖塔群が掘り込まれている。鎌倉時代から室町時代の文字・年号を刻んだ石塔類があり⁽⁴⁾、この付近に佐伯一族の有力者が存在していたことを示している。榊牟礼山の東側にある古市は、中世には佐伯氏のいわゆる城下町的な場であったと考えられる地域である。近年、数ヶ所試掘調査が行われた結果、13~16世紀の遺物や柱穴跡が確認されている。

1. 「佐伯地区遺跡群発掘調査概報」1~Ⅳ 佐伯市教育委員会 1988
2. 賀川光夫「大分県聖岳洞穴」『日本の洞穴遺跡』1967
3. 高橋 徹「上小倉横穴墓」弥生町文化財調査報告書 第1集 1991
4. 小田富士雄「豊後・南海部郡の磨崖石塔群」1961

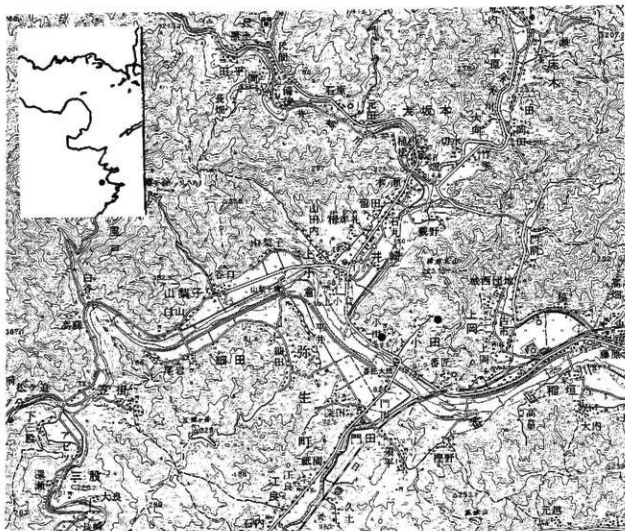


Fig1 調査区的位置 (国土地理院1/50000「佐伯」)



Fig2 小田山城と周辺の遺跡

調査の記録

小田遺跡の調査

前述のように調査地区は谷の奥で、山に登り始めた場所にあたる。もっとも谷水田寄りの所で、谷を横切った土塁状の高まりが認められた。今は廃棄され使用されていない堤である。付近の藪の中に転がっていた石碑から明和6年(1770年)梅雨前に築堤されたものと分かった(Fig 5)。

これよりも山寄りに3ヶ所の試掘区(No1~3T)を設け、手掘りによる調査を行ったところ、そのうちの1ヶ所から縄文時代の遺物が出土したので調査区を拡張して調査した。

調査前の現状は杉林となっており薄暗い谷底付近という景観であった。各トレンチの規模は1tが72㎡、2tが4㎡、3tが14㎡である。



小田山城跡(中央)と樺牟礼城跡(右)

○1tは北方に延びた尾根の先端部を占める場所で、標高42m前後である。層序は岩盤まで4枚あり、約6,400年前の広域火山灰であるアカホヤ火山灰層の上に遺物包含層があった。出土したのは縄文時代中期(約4000年前)の船元式土器の底部と姫島産黒曜石製のナイフの用途をもつ石器片(長さ

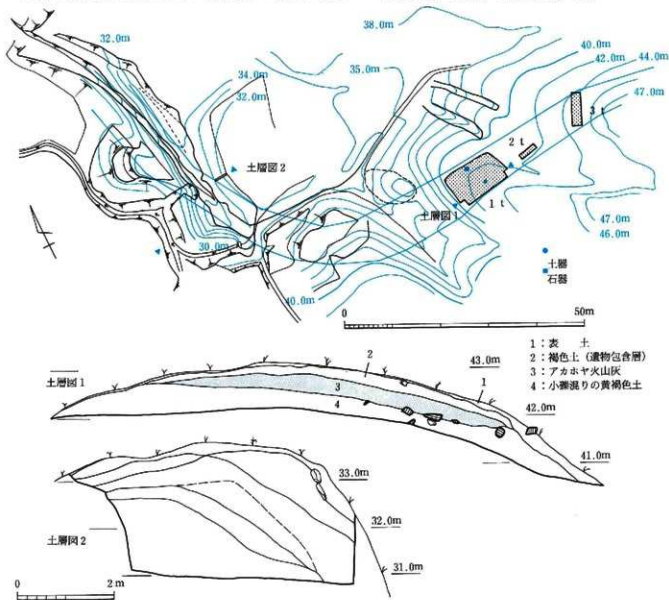


Fig3 小田遺跡調査区の位置と土層断面図



写真(上より)
堤
No.1トレンチ(調査前)
No.1トレンチ(調査中)
同土器出土状態

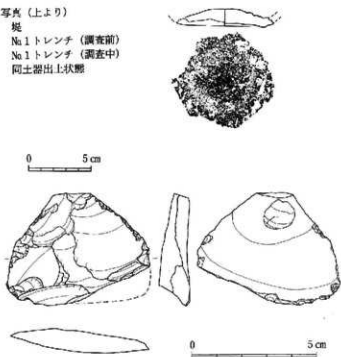


Fig4 小田遺跡出土の縄文時代の遺物

5.7cm。剥片の周辺部に小刻蝕を加えて刃部になっている。(一端を欠損している。)の2点だけである。土器は結晶片岩と角閃石を含み側面に縄文を施文している。

○2 t は岩盤の上に砂礫層が堆積し、無遺物。

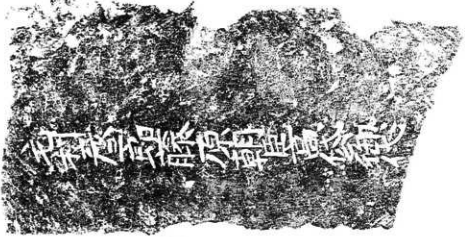
○3 t は1 t の東側にある同規模の尾根で、発掘の結果層序は1 t と同じ堆積状態だったが遺物は出土しなかった。

土層図2を作成した位置は灌漑用堤の土塁部にあたる。現在は堤の内部にも樹齢30年ほどの杉が植えられていて水も貯えられていない。

小田宮の原遺跡の調査

熊野神社の前に広がる台地上は畑地として利用されている。ここに6ヶ所のトレンチを設け、遺跡の確認調査を行った。1 t は6 m × 3 m の規模で、1～8層まで確認した。6層は約4万年前の九重火山起源火山灰で、この層付近は東側が低い地形となっている。平面図に示したのは8層の遺物? 出土状態である。1点だけ、灰白色のチャート製剥片が出土した。他は5 cm 以下の角礫8・円礫1・小礫3である。角礫は岩盤と同じものである。チャート剥片は長さ2.4 cm ・幅1.3 cm ・厚さ0.7 cm ・重さ1.9 g で、片面は節理面、他面は剝離面である。これ自体は使用した石器ではない。

大正展出館名
小田田書
地身七



昭和三年三月三日



昭和三年三月三日
大和 人本道君
天國真ノ里出来社

Fig.5 堀のそばにあった石碑の拓影

○2 t は神社参道の西側にある栗畑の中に設定した幅1 m・長さ13 mのトレンチである。北部の2 m程には地表下約40 cm以下に黒褐色土があり、縄文時代早期の遺物包含層が存在する。土層断面を観察すると地形は左下がりとなっており、トレンチの他の部分では包含層が削り取られて存在しない。一方、南端部からは深さ18 cmの平坦な遺構を検出した。埋土から弥生後期～古墳前期と思われる土器小片が出土した。上部を削られた竪穴式住

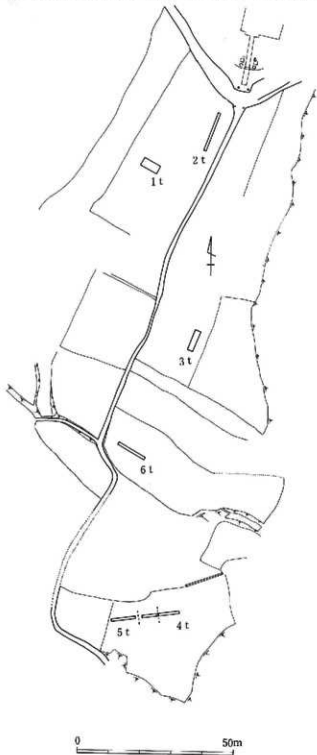


Fig6 小田宮の原遺跡の調査区



No.1 トレンチ8層



No.2 トレンチ竪穴



No.3 トレンチ

居跡の可能性がある。

○3 tは台地中央部付近の畑に設けた幅2m・長さ5mのトレンチである。20cmほどの表土の下はハードローム層が現れるので、もともとあった層は1m以上削り取られている。

○4 tは台地先端部の畑に東西方向に設定したトレンチである。4 tは幅1m・長さ12mである。4 tの地表下30cmほど下には攪乱されていない層が現れる。これはハードロームのようであり、縄文時代早期の黒褐色土層は消滅している。神社周辺の道路崖面の自然堆積から見て、厚さ1m程度の土層が削られているようである。

4 tの中央部から東側にかけて15個の柱穴を検出した。内部に詰まっている土は炭化物を含んだ黒褐色土で、これ以外にも検出した攪乱の穴とは容易に区別できた。西側から3.3mの範囲には検出面から深さ100cmの遺構を検出したが、反対側の掘込み部はトレンチの外にある。5 tには延びてないことを考慮すれば上面の幅は4.5m前後であろう。埋土の中からは中世の土師質の坏・土甕・石臼・製鉄関連の遺物、縄文時代早期・晩期の土器や石器、弥生時代の土器が出土した。底から40cmほどの部分で西側に集中して、角礫や円礫が面的にまとまって出土した。火を受けたものが多く、中に2点の石臼片があった。この遺構は南北方向に延びるようで、形態から見て堀の可能性もある。層・遺物から考えて柱穴・堀とも中世に属するものである。

○5 tは4 tの2m西側に続くトレンチで、幅1m・長さ8mである。4 tとほぼ同じ深さで13個の柱穴を検出した。このトレンチには東西方向の長方形の攪乱が2ヶ所見られた。いもあなの類であろう。

○6 tは3 tと5 tとの中間にある栗畑に位置する幅1m・長さ10mのトレンチである。表土が15cmほどあり、その下に近世・中世の遺物を含んだ層が20~30cm続き、その下が中世の遺構検出面である。遺構は東西に分かれて分布する。東部の最大のものは長さ142cm・幅56cm以上ある楕円形状の浅い穴である。西側には幅50cm弱、深さ10cm以下の溝状のものが走っている。6 tの包含層からも土甕や土師質の坏等の破片が出土した。ここでも削られているため遺構検出面はハードローム層である。

遺物 (Fig9:1~16・PL 16)

1~4は2 t出土の縄文早期の土器である。1は内面をナデ仕上げし、胎土に金色の雲母を多量混入している。外面は山形押型文(やまがたおしがたもん)である。2は両面ともナデ、石英と角閃石を含み外面に棒で線を描く。3・4は無文土器で器面はナデ仕上げ。15は4 t出土の青黒色のチャート製の尖頭状石器。5は2 tの竪穴



Fig7 No.1トレンチ8層の出土状態・土層・出土剥片の図 (1/60)



No.4 トレンチ (上・右)



No.2 トレンチの縄文時代
遺物出土状況
(左)

No.5 トレンチ (右)



No.6 トレンチ (左・下)



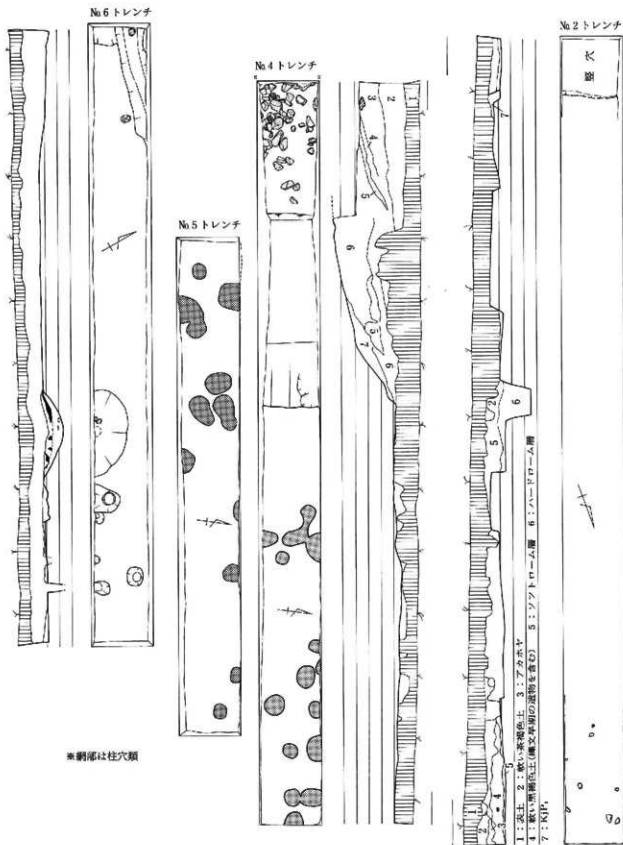


Fig8 No.2・4~6トレンチの遺構検出状態 (1/60)

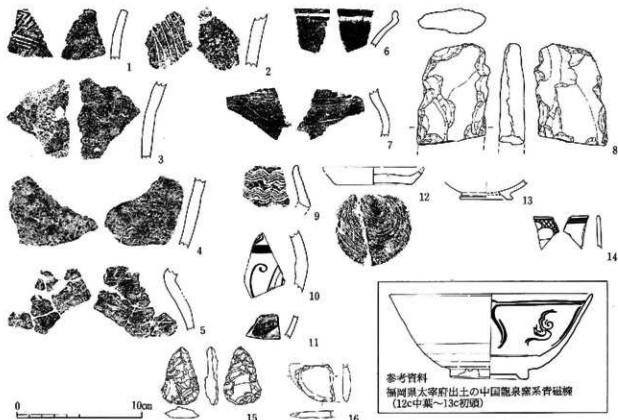


Fig9 小田宮の原遺跡出土および採集の遺物

住居跡出土の土師質土器で内面はナデ、外面不詳。胎土は茶色の砂粒を混入。6は4tの甕?埋土から出土した縄文晩期中頃の浅鉢形土器で、長石を多量に含む。7は1tの表土出土。8は黒い安山岩質の石材の横長剥片を加工した打製石斧。7・8は6と同じ頃であろう。9は弥生後期の尊。16は緑泥片岩製の石包丁のかけらで、弥生時代の稲の穂積み具である。1t南方の台地端部で採集した。10は黄褐色の釉が外面にかかった陶器で、模様は上端に菱形?の印文、その下に幅広の横方向の沈線、下半部に沈線の曲線文がある。鎌倉期の古瀬戸であろう。10~12は4t出土。11は内面に2本単位のクシ描き文をもち、両面に草色釉がかかる。中国の宋時代の青磁碗である(完形品を参考資料として図示した。)。12は土師質の糸切り底の小皿である。胎土に茶色の斑を混入する。

底径6.2cm、口径は推定8.2cm。13は6t出土の瓦質土器で内面は滑らか、外面はヨコナデ仕上げしている。12・13は13~14cに属するものであろう。14は5t出土。菊花文の染付けで18C後半の肥前産磁器。Fig10の1・2は4tの石が集中的に分布していた部分から出土した石臼である。1は上白で復元径は31cmで高さ10.3cm。下面の溝は擦り減って消えている。2は別個体である。茶臼の下白で、故意に割



No.4 トレンチの製鉄関連遺物

られたような剝離の状況を示す。溝は8分割で1区画に7溝をもつ。13・14とも凝灰岩製である。

このほか4tの堀?の埋土からは写真に示すような製鉄関係の遺物が出上している(10ページ)。付近に中世には製鉄炉があったものと思われる。

おわりに

林道建設に伴う今回の小田山城跡周辺の調査は、近年実施された佐伯市側の榎牟礼山城跡周辺における発掘調査では不明であった榎牟礼西麓の一面を明らかにする新たな機会となった。特に台地先端部での柱穴群や大規模な堀跡の可能性をもつ中世遺構を確認したことは鎌倉時代の小田地区の重要性を認識させたが、この問題の解明のためには別の機会に広範囲・継続的な調査が必要であろう。

一方、九重火山灰層下の剥片が人工品であれば九州最古級であり、この点他遺跡においても今後は注意していきたい。縄文・弥生・古墳時代の遺跡も確認できたが、これも調査面積が小さいため全体の様子は明確にはなっていない。

遺跡は虫食い状に開発の波に呑み込まれ始めているので注意が必要であろう。

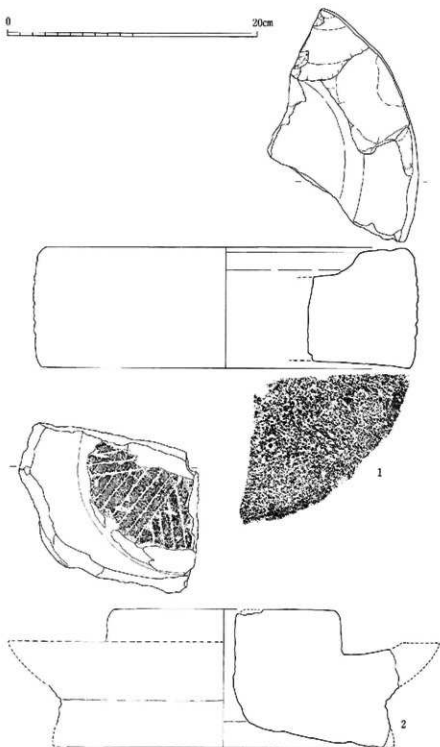


Fig10 小田宮の原遺跡No.4トレンチ出土の石片

報告書抄録

ふりがな	こだやましろとかんれんいせき							
書名	小田山城跡と関連遺跡							
副書名	第1次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	弥生町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第3集							
編著者名	高橋信武							
編集機関	弥生町教育委員会							
所在地	〒876-01 大分県南海部郡弥生町大字上小倉663番地 TEL 0972-46-2304							
発行年月日	1994年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こ 小 田	新田いたけんのあまべぐん 大分県南海部郡 やましろ 弥生町大字小田 あまべぐん 字小田			32度 57分 30秒	131度 49分 30秒	19931101 ～ 19931110	90㎡	林道建設 に伴う事 前調査
こ だ あやの ほら 小田宮の原	あやのほら 弥生町大字小田 あやのほら 字宮の原			32度 0分 30秒	131度 30分 30秒	19931115 ～ 19931207	71㎡	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小田	包含層	縄文		中期土器・石器		狩猟の遺跡か？		
小田宮の原	集落跡	縄文 弥生 弥生～古墳 中世 近世	竪穴住居跡 1基 堀 1ヶ所 柱穴	押型文土器 石包丁 土器片 古瀬戸・青磁 肥前系磁器		館跡か？		

小田山城跡と関連遺跡

第1次調査報告書

弥生町文化財調査報告書 第3集

1994年3月31日

発行 弥生町教育委員会
大分県南海部郡弥生町上小倉663番地
0972-46-2304

印刷 佐伯印刷株式会社
